

応援しました児童の学習



杉山さんの説明をノートに書き留めながら聞く上郷小学校2年生

麦と麦を同時に
田植えをすることが
見ることができ
ました。

6月9日、市立上郷小学校2年生が田植え作業の見学にやってきました。学校から八方原までは約2km、ノートと水筒の入ったリュックを背負って、元気いっぱいでした。

田植えを見たことがある人？と聞くと4分の1くらいの児童が手を上げてくれましたが、実際の作業を間近で見るとは多くは無いでしょう。

説明は杉山さんが行いました。稲の種類や、それらが何になるのか、どんな苦労をしているのかを説明しました。丁度、麦の収穫もしていたので、その様子も見ることができました。

数日後に児童からお礼の手紙が届きました。どの文章にも感謝の言葉とともに「お米に種類があることを初めて知りました」「田植機に載ってみたいです」などたくさん感想が書かれていました。

なかなかピッチが上げられない

農地の南側半分では田植えが始まったものの、北半分では天候の関係で遅れてしまった麦の収穫が行われていました。収穫前の風雨で倒れてしまったものもあり、収穫には予想以上に時間がかかったようです。「機械の速度を上げるとせっかく熟れた麦の穂がとびちってしまうので、速度を上げられない。」オペレーターはじりじりしながら操作レバーを握っておられました。収穫の直後、トラクターが耕して水田に、大忙し。



作業は夏の日差しと粉塵との戦い



24本の苗を植えた

大きく育て花壇の朝顔

今年の花壇は「朝顔」としました。地域の景観の向上の一環です。朝顔は上に伸びていきますので、支柱を立てて網を張りました。

植え付けも共同作業 新鋭機がたんぼを駆け巡る

田植えが6月8日から始まり週末を中心におよそ10日間で終了しました。法人で植える田んぼでは、最新鋭の七条植えの田植機が登場。見る見るうちに苗が植え付けられていきます。

機械も新しくなりましたが、操作を担当する人もぐんと若返りました。週末で仕事の休みを利用してという人が多かったのですが、3世代目の参加も少なくありません。ベテランたちの心配顔をよそに、すすいと機械を操ります。新しい機械は新しい人財の確保に有効なのかも知れませんね。

今回の田植えに備えて育てられた苗



二代目が主力となる傾向が一気に高まった

は以前のように苗の上から水やりをするのではなく、水を張った圃場に苗箱を置きその中で苗を育てる方式で育てたものです。水やりの労力を管理の部分軽減できたのではないのでしょうか。

田植えの時期には各地で、「田植えまつり」が行われています。広島県北広島町の「壬生の花田植え」は国の重要無形民俗文化財に指定されるなど、その価値は内外に知られています。豊作を願う祈りと同時に、つらい労働を楽しくこなすための工夫だったのでないでしょうか。

苗代での苗取り、代掻き、定規を使った正確な植え付け、機械化のできなかった時代の田植えは、まさに重労働、水の管理はそれこそ命がけだったとも、先人の苦勞が忍ばれます。



新鋭機の七条田植機、30アールを1時間で

「交流」から転がり出た地域の宝物

市では「協働のまちづくり」を進めています。これからは行政が、多種多様な住民要求の全てにこたえることはできません。行政と住民グループ、企業

と住民グループなどスタンスの異なる団体の力を出し合うことがそれぞれの課題解決につながるというのが趣旨です。3年前から高崎経済大学の桜井常矢教授を招いて定期的な講座を開いています。6月21日には、小郡ふれあいセンターで講演会が開かれ、市の各地から地域づくりの関係者が話を聞きました。

元気な地区のポイントとは、交流であるといわれています。その交流の効果

の実例を聞くことができました。

新潟県上越市安塚区の細野という地区では、地域おこしの



桜井教授のお話は事例が中心

お祭りを企画したものの、何もプログラマが決まらないう、仕方なしに地元「草団子」と山菜でおもてなししました。「草団子」というのは新潟ではどこでもあるもので、誰もわざわざ買おうというものではないとのことでした。ところがその草団子が、他地区の人から「うまい」と絶賛。それがきっかけになって交流宿泊施設まで運営しているというのです。

地元の宝物は自分たちでは、気づかぬもののようなものです。自分たちの当たり前は、よその地区ではびっくり仰天のこともあるかもしれないということです。「交流」がなければ、地区の宝物は今でも分からないままだったでしょうね。地域の資源が地域の力になった実例でした。



実際には苗や肥料の補給係の方が重労働